<随　想>

ゾルゲと尾崎さんのこと

――サン・シャイン（元東京拘置所）を横に見て――

中　西　五　洲（中高年雇用・福祉事業団全国連合会）

私は今東京と松阪で仕事をしているので、豊島区の大塚にマンションを借りている。このマンションから2キロ足らずのところに、東京の新名所となったサン・シャインの60階がある。東京都の新庁舎が新しく日本一高い建物になったようだが、それまではこのサン・シャインが日本一と言われていた。私は5、6年前から糖尿病を患っているので散歩を欠かせない。それでサン・シャイン往復というのが私の散歩コースの一つとなった。このサン・シャインのそばを通ると、忘れることのできない記憶がよみがえってくる。

◇　　◇

昭和18年のことである。このサン・シャインの前身は東京拘置所であったが、ここに拘留されて1年近く苦しんだ、いや呻吟した。それは私の数え年で21歳のときのことで、その記憶は今もなまなましい。若かったので腹が空いて、すいてどうしようもなかった。運動場に出ると、たぶん「ハコベ」であろう、眼にくいいってくる鮮やかな緑色の草をそっとぬき取って、袂に入れて持ち帰り、独房で洗って食べた。見つかれば懲罰ものであろう。毎晩見る夢はきまって食物の夢、水羊羹を口に入れようとすると眼がさめる。暫くは空腹感で眠ることができなかった。

その頃私は朝鮮人の学生二人と研究会を持って、戦争のこと、経済学のこと等を話合っていたが、それが治安維持法違反事件としてデッチ上げられて、東京警視庁に逮捕された。私は兄の中西功から強い思想的影響を受けていたので、支那事変も大東亜戦争も侵略戦争だと思っていたし、戦争に反対しなければならないと考えていた。気持を吐露して話しあえる友達をつくることが先決だと考えて、その研究会を持ったのである。幸い二人の朝鮮人学生とは意気投合することができた。私は自分の行動が正義の行動であると信じていたし、自分の生命を捧げるに値すると思っていたので、拘留されても、くじけることはなかった。しかし栄養失調と心労と怒りが重なって、表現としては呻吟（うめく）がぴったりする日々であった。

今夜もそのサン・シャインの横を通りながら、その大きな建物を横眼でみながら甦ってくるものがあった。それは、ここで処刑されたゾルゲや尾崎秀実さんのことであった。私が拘留されていた時、二人の兄（中西　功、中西三洋）がそれぞれ別の事件で同じくここに拘留されていて、偶然にも兄の中西　功と理髪所でバッタリと会い、二言、三言、言葉をかわすことができた。その日は夜になっても興奮がさめず、寝つかれなかったことを思い出す。

なんといっても、最大の思い出は尾崎秀実さんとゾルゲのことである。この二人は国際スパイ団の首領として、ある限りの罪名を着せられて、昭和19年の終わりか、20年の始め、敗戦の直前に、この拘置所で処刑されている。この二人の魂がまださまよっているように感じられて、ここを歩くと私は緊張するのである。実は私は尾崎さんとは面識があって、昭和17年だと思うが、私が尾崎さんを訪ねた時、尾崎さんは「ああ、五洲君ですか、功君からたのまれてます。いくら入用ですか」とニコニコと手を差しのべてくれた。明るくて、快活で、一度で好きになってしまう人であった。後から考えても、生命をかけて仕事をしている人にはとうてい見えなかった。

◇　　◇

ゾルゲ事件のことは沢山報道されてきたので、ご存知の方も多いと思うが、ゾルゲと尾崎は人類の幸福という大事業のために、直接的にはソ連社

会主義を守るために、大きな仕事をし、自分の生命を捧げたのである。しかしなんというめぐりあわせであろうか、そのソ連社会主義はいま、崩壊している。

私はゾルゲ事件に早くから魅せられて、出された本、新聞報道を多く読んできた。だから、ゾルゲとは一面識もないのに、他人のようには思えなくなっている。先日もＮＨＫテレビがゾルゲ事件の注目すべき最新情報を報道した。ゾルゲが日本から送った電報がモスクワの文書保管庫に保存されており、その電報をもとに報道がされていた。そのなかでゾルゲ、尾崎らは、十数人の同志と共に二つの大きな仕事をした事実が明らかにされている。

その一つは、ヒトラーがソ連攻撃を1941年６月22日に開始するという断定的な情報を、ゾルゲはオットー・ドイツ大使らから入手して、ソ連に通報している。既にご承知の通り、これは正確きわまる情報であった。この情報を受けたスターリンらは、この情報は嘘報であるとして取り合わず、電報の欄外にはデマ情報という書入れがしてあるとのこと。これが初戦でソ連が大きな打撃を受ける原因の一つとなった。

二つ目は、当時日本は、ドイツ・イタリアと三国同盟、防共協定を結んでおり、この協定に従って日本がソ連攻撃に向かうかどうかがポイントとなっていた。ヒトラーはそれを強く望んでいた。モスクワはゾルゲに正確な情報を求めてきた。当時の松岡外相らはソ連攻撃論者で日本の支配層は二つに割れていた。戦争を遂行するためには南方の資源を制圧すべきだという南進論と北進論が争っていた。最後には南進論が優勢となり、極秘の御前会議で南進が確定され、日本は太平洋戦争に突入していくことになる。尾崎は近衛内閣の顧問であって、近衛首相に強く信頼されていた。尾崎が御前会議の決定を入手するに困難はなかった。むしろ、尾崎らは積極的な工作をすらやったらしい。尾崎から情報を得たゾルゲはモスクワに暗号で通報した。私のなすべき仕事はすべてやり終えた、帰国命令を出してくれとも要請している。当時独ソ戦は天王山にきていた。ヒトラーの軍隊はモスクワに達し、スターリンらは都おちをして首都をクイビシェフにおいていた。今回はゾルゲ情報に対する評価は高く、スターリンらは的確に対応した。日本の攻撃を予想して極東方面に展開していた大軍団の中から何十万という軍隊を、ヨーロッパ戦線に転換・投入したのである。これを境に独ソ戦はソ連に有利に傾き、ヒトラーの大敗北となる。極東軍のヨーロッパへの投入がなければ、戦況はどうなっていたかわからない、ヒトラーの一定の勝利が絶対ありえなかったとは言えないという論者もいる。ヒトラーが生き残り、アメリカ、イギリスと妥協するという事態を想像すると、その後の世界の情勢は今日とは全く異なる展開をしたであろう。そんなことをいろいろ考えると、ゾルゲ、尾崎らの仕事の意味は小さくなかった思う。ＮＨＫテレビは、かつてこのような大きな仕事をしたスパイはいないと結んでいる。勿論ゾルゲ、尾崎は単なるスパイではない。立派な共産主義者であり、ゾルゲは哲学博士であり、尾崎は東大出の中国問題の権威者であり、近衛首相のブレーン（知恵袋）とも言われていた人である。

◇　　◇

今晩も二人が処刑された近くを歩きながら考えた。

二人は今日のソ連の崩壊をどう見ているだろうか。二人は絞首台に従容として向かったそうだし、自分の運命をよりよき人類のための大事業に捧げて悔いることはなかったのだ。それだけに、焦眉の問題である人類危機の克服とほんとうの社会主義の実現のために、自分のなしうることはすべてしておかねばならないと、改めて考えた。

（1992年１月15日）

（補遺）

これを読み返してみて、ホッと気付いたことがある。東京拘置所は未決囚の収容所であったから処刑施設は無かったのではないか、他の刑務所で処刑されたのかもしれない。しかしこの場合、場所は私にとってどうでもよいことなのである。二人が処刑されたのは明確で厳粛な事実なのだか

ら。二人はここで2年も3年も私と同じように、いや、それ以上呻吟したのだから、処刑された場所を確認して、想い出を修正する気にはなれない。

読者にゾルゲ事件の本のご一読をおすすめしたい。人類の運命に大きな影響を与えた緊迫した歴史の一コマをそこに見ることが出来るだろうし、その一コマを立派に生きた人間の姿を見出されるだろう。

新　刊　図　書　紹　介

東久留米・老いを考える会　編
老人医療の選び方
—市民の医療マップづくり—　海鳴社 発行

・お年寄りが倒れた時、また慢性化した時安心して入れる病院は。市民が自ら医療マップづくりに取り組む。患者中心の医療・福祉のあり方と、お年寄りが地域でともに生きるための市民の医療情報ネットワークづくりを呼びかける。
・264頁、定価1,854円、91年9月刊。
・お近くの書店か、海鳴社(千代田区西神田2-4-5、電話03-3234-3643）へ直接注文を。協同総研でも取り扱っています。

石塚秀雄　著
バスク・モンドラゴン
—協同組合の町から—　彩流社 発行

・モンドラゴンのユニークな労働者協同組合の実情、人々の暮らし、歴史、バスク民族の姿を石塚秀雄氏が執筆。30点の写真も新たに収録。
・208頁、定価1,800円、91年12月刊。
・書店か、彩流社（千代田区富士見2-2-2、電話03-3234-5931）へ注文を。協同総研でも可。

集会実行委員会　編集発行
「考えてみよう長野県での協同を」
第2回集会報告集

・昨年6月に開催された第2回目の長野県協同集会の報告集。内容紹介、講演：富沢賢治「やってきた協同の時代」／水資源を守る浄化槽の普及（農協開発機構）／4生協合同への展望／老人介護施設づくりを住民とともに（厚生連労組）／今、文化は歩きだす（伊奈芸術文化協会）／広がる働く人の協同組合（事業団）／協同と自治のネットワークづくり（飯伊地区交流集会）／4分散会の記録等
・B5判54頁、頒価800円（送料1冊250円）、91年12月刊。
・注文は長野事業団（長野市中御所2-6-1、電話0262-24-3886）か、協同総研（切手でも可）へ。

中高年雇用・福祉事業団全国連合会、
シーアンドシー事務所　協同編集発行
労働者協同組合への招待

・〝働くことの新しいかたちを〟〝あなたも労働者協同組合を始めませんか〟とよびかける労働者協同組合への初めての案内書。カラー印刷で写真、図版も満載。
・インタビュー・NHKアナウンサー古屋和雄氏に聞く／ルポ・新労働者協同組合の探検／各界からの期待の声／佐藤和夫:学生たちとの対話／池上惇：仕事おこしの経済学／ヨーロッパの新しい波と海外レポート等。
・A4判32頁、定価650円、送料1部210円、92年1月刊。
・10部以上の注文の場合は定価の2割引で卸します。ただし、送料は別途実費をいただきます。3ケ月後精算ですので、普及にご協力を。
・注文は、協同総合研究所か、シーアンドシー事務所（文京区関口2-2-8電話03-3944-0962）へ。お電話でもかまいません。